すべては一塊の陶土から

小前晴美
(栄11期・旧姓鈎巻)

オブジェを中心に作陶する陶芸作家として活動する事はや十九年。美術大学で専門教育を受けた訳でもない私が陶芸の道へ進むきっかけとなったのは〝子供達の巣立ち〟でした。

進学等で子供達が家を離れた丁度十九年前、私はいわゆる〝空きの巣症候群〟状態。元気のない様子を見兼ね、夫が勤務先の陶芸サークル入会を勧めてくれたのが作陶生活のはじまりとなりました。

元来、手仕事が好きな私。家事・育児の合間に七宝焼等を習っていましたが、習い事の域を越えるという事はありませんでした。ところが、陶芸の持つ魅力にはたちまちのうちにとりつかれてしまったのです。

「無」の土から自分の世界を創り上げていく充実感。窯を開けるまでその仕上がりが確定しないという緊張感。開けてみて、想定以上の作品ができあがっていた時の高揚感と失敗していた時の喪失感。あまたある創作活動の中で、これほど劇的かつ刺激的なものはないのではないでしょうか。

子離れの寂しさを埋めるかのように、自宅地下駐車場の一角にスペースを作り、いつしか毎日作陶に励むようになっていました。サークルでは基本的な事を先輩から教わり、後は各自の研鑽に任されておりました。大変ではありましたが、自由に創意工夫できるという点も私の性格には合っていたようです。地方では手に入りにくい本等を東京にいる子供達に送ってもらっては、それを参考に〝自分の世界づくり〟に夢中になっていきました。

作陶だけでは飽き足らなくなり、その五年後、全道展工芸部門初出展初入選。以後連続入選し、平成十二年には奨励賞を受賞。同年自宅庭にアトリエ〝陶工房風炎〟を築窯。以後創作・展示活動に専心する傍ら、陶芸教室も開始。平成十六年には全道美術協会会員となり、全道展応募作品を審査するという立場にもなりました。その二年後には、念願の個展を丸井今井室蘭店にて開催。昨年は第三十一回日本新工芸展初出品初入選、第二十七回日本新工芸東北会展初出品河北新報社賞受賞と中央の公募展への進出も果たす事ができました。今年二月には日本新工芸東北会会員に推挙され、第三十二回日本新工芸展奨励賞（一般公募）受賞。日本新工芸展の昨年の入選作品、今年の入賞作品は東京六本木の国立新美術館で展示され、感無量のものがありました。

創作活動は始めたばかりの頃はそれだけで嬉しく、ただただ楽しいだけです。しかし、技量が上がり、目が肥えてくるにつれ、思い通りに仕上がらない時のもどかしさ、歯がゆさのストレスがそれ以上に大きくなっていきます。作っているだけで満足していられた時期は本当に短かったです。

第32回日本新工芸展
奨励賞受賞作品「霜華」
2010/5/12東京六本木国立新美術館

又、私の場合、家庭の事情、自分の入院で作陶が思うに任せなかったり、陶芸作家として活動する事に対する夫の理解を得られない時期もあり、決して順風満帆とは言えないものでした。

陽・動のイメージが強かった初期の頃から、次第に陰・静の様相が深まってきた最近の作品を見比べていくと、その時々の出来事、心の有り様が鮮やかに思い出されます。思い返すに実生活の悩みを作陶で昇華し、作陶上の葛藤が実生活の達観へと繋がったこの十九年間でした。

そしてそれは、多くの事を学び、思いがけぬすばらしい出会いを得て、世界を広げてきた歳月でもありました。特に若い頃、大学進学が適わず、学歴コンプレックスに悩まされ続けてきた私でしたが、陶芸を通じそれからも解放されました。まさに、すべては一塊の陶土からはじまったのです。

それから十九年。構想どおりに作陶できた時は欣喜雀躍し、できない時は意気消沈しと気忙しい現在。以前には想像もできなかった現実に「こんな年齢になって何をやっているのやら。」と思う事もあります。しかし陶芸とともに歩んでいく以上、自分の内なる心の叫びに真摯に向き合い、それをオブジェという形で表現していくしかないのだろうとも思う今日この頃です。

今回、私のみならず、父、妹弟、夫、二人の子供達がお世話になった母校同窓会誌からの寄稿依頼は驚きとともに大変嬉しいものでした。遅咲きの作陶生活を振り返り、今後の活動に向けて自分自身の励ましとなる機会を戴きました事を深く感謝致します。

健康に留意し、応援してくれる家族の気持ちを大切に、気力・体力の続く限りこれからも作陶に取り組んでいきたいと思います。

(日本新工芸東北会会員・全道美術協会会員・室蘭地区陶芸協会会員)
陶工房風炎
http://homepage3.nifty.com/fuen/

2009/5/17第32回日本新工芸展入選作品「佇む女(ひと)」を前に
東京六本木国立新美術館にて在京の子供達と。